

阿部 七海

ABE Nanami

公共空間で行われるアートプロジェクトに関する一考察 ―つくば市での実践から―

A Study of Art Projects in Public Spaces: From Practice in Tsukuba City

芸術支援領域

2024.10.10

アートプロジェクトと呼ばれる創造活動について、その公共空間との関係に焦点を当てて考察を行った。アートプロジェクトは芸術活動の一つの形態であり、日本では1990年以降に各地で行われている。その特徴として、プロジェクトを行うことで社会に何らかの変容を与えようとすることや、企画立案から実現までのプロセスが表現の一部に含まれることなどが挙げられる。

筆者は茨城県つくば市で活動する平砂アートムーヴメント（HAM）のメンバーとして、アートプロジェクトの実践に携わっている。その2020年度の活動『HAM2020：OPEN SPACE』（『HAM2020』）では、公共空間を会場にいくつものイベントを開いた。アートプロジェクトの会場として公共空間を使ってみると、公共空間には特有のルールがあり、そのルールはアートプロジェクトの計画に関わるものであるように思われた。筆者は実践者の一人として、もし公共空間を会場することでアートプロジェクトがなんらかの影響を受けるならば、その影響や背後にある仕組みを把握し、対策や活用の対象とすべきだと考える。本研究ではこの問いを背景として、公共空間がアートプロジェクトにもたらすものを考察することを目的とする。

主題の考察のために、文献調査とアートプロジェクトの実践を行った。実践については、平砂アートムーヴメントとして『HAM2022：わたしより大きなりんかくがみえる』（『HAM2022』）を開催した。2021年10月から2023年4月の期間に、つくば市中心市街地の公共空間でアートプロジェクトを展開し、その過程において公共空間のルールやそのアートプロジェクトへの影響を観測・記録するという企画である。『HAM2022』の企画にあたってはハンナ・アーレント（Hannah Arendt 1906年–1975年）による公共的空間に関する議論を参照しており、このことが活動の特徴を形作っている。

第一章では、アートプロジェクトに関する先行研究を対象に文献調査を行い、その結果から公共空間とアートプロジェクトの関係を考察した。アートプロジェクトに関する研究は、その言葉が広まり始めた1990年代からの蓄積がある。まず、公共空間とアートプロジェクトの関係が示されている記述に着目して先行研究を整理し、公共空間とアートプロジェクトの関係についての議論の状況や成果を述べた。先行研究では、次の3つの方向性においてアートプロジェクトと公共空間の関わりが議論されている。

①アートプロジェクトの成立の背景についての研究
アートプロジェクトが成立した背景等について考察する研究において、アートプロジェクトの源流となった活動と公共空間との関係が指摘されている。加治屋健司は、アートプロジェクトの成立について、1950年代から1980年代に行われていた3つの活動の存在が関係したと論じている。そのうち最初期に行われていた野外美術展は、「画廊で展示するよりも多くの人の眼に触れることを考えた結果として」始まったとされる。この点について、不特定多数の人に開かれているという公共空間の特性が、野外美術展の契機になったことが示唆されているといえる。

②アートプロジェクトにおけるアートマネジメントについての研究
アートマネジメントに関する研究において、公共空間で行われるアートプロジェクトに特有の課題とその対策についての議論がなされている。吉田は『あいちトリエンナーレ2019』で起こった騒動を検証し、公的機関と関わることで表現の自由が内発的・外発的に制限される状況がつけられることを指摘し、またその対策の検討を行っている。常泉らは、不特定多数の市民の目に作品が触れるなど、公共空間で行われるアートプロジェクトでは、それを取り巻く主体の間でコンフリクトが生じることを指摘し、その

間を取り持つ中間組織の必要性を論じている。

③アートプロジェクトを事例とする、アートの公共性についての研究
公共空間で行われるアートプロジェクトの現場での実践から、アートの公共性を考察する研究が見られた。中島は広島市立大学芸術学部が行ったアートプロジェクトを事例として取り上げて、公共空間で行われるアートプロジェクトが、まちづくりに繋がって公共の再構築に働きかける可能性があると論じている。

先行研究の成果を踏まえ、本研究及び今後のアートプロジェクトに関する研究における課題を考察した。第一に、公共空間がアートプロジェクトにもたらすものについて、より注意を払うべきだろう。先行研究ではアートプロジェクト成立の背景と公共空間との関わりや、公共空間で行われることを条件としてアートプロジェクトの現場に生じる障壁の存在が示唆されていた。このことから、アートプロジェクトを公共空間で行う場合には、それによってもたらされるものを活用あるいは対策の対象とすべきであると考える。第二に、「公共」という言葉の多様性に注意が必要である。日本語の「公共」は、論者の各種多様な倫理観、価値観の受け皿となっていることが指摘されている。そのため「公共」に投影される論者の価値観に注意して議論を行う必要がある。

第二章と第三章では、『HAM2022：わたしより大きなりんかくがみえる』（以下『HAM2022』）の実践を通して、公共空間とアートプロジェクトの関係について考察を行った。

第二章では、『HAM2022』のテーマに焦点をあてた。第一節では『HAM2022』の背景を活動を取り巻く環境の側面から考察した。まず、つくば市行政の文化芸術活動に対する支援の状況を調査した。つくば市による文化芸術活動に対する支援は十分とは言えない状況にある。そのような状況で、HAMはまちづ

くりを目的とした市の支援事業を利用することでアートプロジェクトの予算を補うことを選択肢に入れている。HAMが『HAM2022』で利用した「つくばペデカフェプロジェクト」は、公共空間の利用に必要な手続きを利用者に代わってつくば市が行うという仕組みである。この施策は中心市街地の空洞化への対応として始まったもので、まちづくりに関わる事業を対象とするものであるが、『HAM2022』にとっては公共空間で作品の発表がしやすい環境にもなっていた。

第二節では『HAM2022』の動機について考察した。『HAM2022』の動機は『HAM2020』での経験から生じた。『HAM2020』もまた公共空間を拠点とするアートプロジェクトであり、その活動の中で経験した手続きや展示空間としての公共空間の面白さを探求するために『HAM2022』の開催が計画されることとなった。公共空間を探求する企画を構想していく過程では、それまでの自分が公共空間の意味に目を向けることなくその場所を利用していたことに気づいた。『HAM2022』ではその過去を反省し、公共空間の使い方を活動を通して捉え直すことが目指された。

第三節では、『HAM2022』がハンナ・アーレントの言説を参照していたことに注目して考察を行った。『HAM2022』の動機には公共空間の意味や使い方を捉え直したいという思いがあったが、この活動の原理を、アーレントが人間が必要から解放されて自由になりうる場所として公共的空間を描いたことに重ねることができる。『HAM2022』はこの接点を足がかりとして企画されており、いくつものイベントを公共空間で開催することで、アーレントにおける公共的空間をつくば市の公共空間に再現することが試みられた。その狙いは実際の公共空間とアーレントのための自由のための空間の二つの差異を観測することにあった。そして観測される差異を手がかりにこれまで見過ごしていた公共空間に再び目を向けることで活動の目的を達成しようとしていた

のである。この差異の観察には、アートプロジェクトにおける表現の一部でもある実現のプロセスの存在が重要であった。例えば一つのパフォーマンスについて、その上演までの過程で経験される困難さが、つくば市の公共空間のありようを示す根拠になる。このことから、公共空間の探求をテーマとする『HAM2022』がアートプロジェクトという形態で行われる背景には、プロセスが表現の一部であるという特徴が関係していると考察した。

第三章では、『HAM2022』を実施するプロセスで生じた出来事を見ていくことで、その方法論の効果を検討した。第二章で述べたように、『HAM2022』の背景には『HAM2020』での公共空間の経験が関係していた。また『HAM2022』は一体的に計画された複数のイベントからなるアートプロジェクトである。これらのことから『HAM2022』のプロセスには、経験に基づいて行われた企画の段階と、イベントの計画を現実のものにしていく実施の段階の2つの段階があることがわかる。そこでこの2つの段階に分けて記述と考察を行った。

結果は次のとおりである。企画の段階においては、アーレントの議論における自由や政治、活動のための空間としての公共空間のイメージと現実の公共空間のあり方を比較する視点が設定されることで、法律や利用のルールと距離をおいて、公共空間の人間にとっての役割を考察することが可能になるという効果が見られた。実施の段階においては、公共空間が行政によって管理されているということに違和感を抱くという効果が見られた。『HAM2022』では、その違和感からパフォーマンスイベントを企画した。パフォーマンスイベントをつくば市と共催で行うことで、公共空間を管理し、まちづくりに活用しようとする立場が、公共空間で行われるイベントに対してどのような懸念を抱くのかを考察することができた。以上の効果が見られたことから、

『HAM2022』の試みは成立していたと評価した。

終章では、本研究で明らかにすることができたアートプロジェクトと公共の関係をまとめ、公共空間で行われるアートプロジェクトの展望を述べた。

第二章と第三章での考察から、『HAM2022』におけるアートプロジェクトと公共空間の関係を、「公共空間について批判的に考察するための道具」であったと結論づけた。この結論と第一章の文献調査において見出された議論の成果とを合わせて、アートプロジェクトと公共空間の関係について次の4点が認められることを主張する。

- アートプロジェクトの源流において、公共空間が新たな動向を受け入れ、発展させる場所となったことが示唆されていること
- 公共空間で行われるアートプロジェクトが、アートの公共性についての考察を生むフィールドとなっていること
- 公共空間で行われるアートプロジェクトについて、公共空間を条件として起こる危機や新しい表現が生じる可能性があること
- プロセスが作品の一部であるというアートプロジェクトの特徴が、公共空間について批判的に検討するための手法になり得ること

主要な参考文献

- 加治屋健司「地域に展開する日本のアートプロジェクト―歴史的背景とグローバルな文脈」, 地域アート 美学／制度／日本, pp.97-133. 堀之内出版, 2016年.
- 権安理. 公共的なもの―アーレントと戦後日本. 作品社, 2018年.
- 常泉佑太, 伊藤香織と高柳誠也, 「公共空間で行われるアートプロジェクトでの中間組織の役割に関する研究―東京アートポイント計画『TERATOTERA』を事例に―」, 都市計画論文集 56巻, no.3号 (2021年) : pp.665-672.
- ハンナアレント, 人間の条件. 翻訳者:志水速雄, 筑摩書房, 1994年.